



スーフ・キャンプの少年たちも、以前より真剣にサッカーの練習に取り組むようになってきた

力隊の角田<sup>すみだ</sup>さんが、グラウンドの少年たちの動きを見つめる。学校の授業がすべて終わる夕方、10〜16歳の少年たちを集め、基礎技術の向上やチーム練習などを行う。学校の時間が短く、公園などもほとんどない難民キャンプでは、少年たちが放課後の時間を無駄に持て余すことが多い。「何かに一生懸命打ち込み、目標に向かって努力するという経験を、サッカーを通して彼らに伝えたい」。そんな思いを、角田さんは抱いている。

活動当初は、チームのボールを誰かが勝手に持ち帰ってしまったり、窮屈な難民キャンプで育った故のフラストレーションからか、ささいなことでもよくけんかすることもあった。その

### 生徒の心を育む より充実した情操教育を

近代的なビルが建ち並ぶ首都アンマンの外れ。難民キャンプではないが、パレスチナ難民とその子孫が多く住むスズハ地区にあるスズハ第3女子小中学校の一室は、まさに体育の授業の真っ最中だった。

「もっとひざを引き付けてー!」「そう、上手だね!」  
女子生徒たちがマット運動の

パレスチナ難民のための女子小中学校で、体育の授業を担当している土岐さん(43歳・愛知県)。学校の冬休み期間には、近隣校とのドッジボール大会も企画した



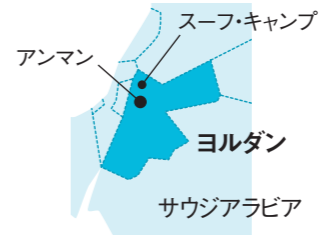
### つらい難民生活を 乗り越えるために

「前へ出せー!」「こっちだー!」  
コンクリートの簡素な集合住宅が続く町並みに、元気な声が響き渡る。町の一角にあるアスファルトのグラウンドで、少年たちが真剣な表情でサッカーボールを追いかけている。

## パレスチナ難民の 青少年たちに希望を

スポーツの楽しみを知らずに育った少年少女に、体を動かし、仲間と力を合わせることの喜びを伝えたい。

JICAボランティアのそんな思いとともに、ヨルダンに住むパレスチナ難民の青少年たちが、スポーツを通してかけがえない経験を重ねている。



最初の難民がヨルダンに移り住んでから半世紀以上。難民キャンプで生まれ育った少年たちの心の中には、まだ見ぬ故郷・パレスチナがある

遺跡で有名なヨルダン北部の観光都市・ジェラシユの郊外。中心部には小さな商店が数多く並び、人々や車が行き交う。郵便局や警察、病院もあり、一見、普通の町のようなのだ。しかしこの町が特別なのは、約2万人の住民が、アラブ諸国とイスラエルとの長年の紛争で故郷を追われた「パレスチナ難民」だということ

と。ここは、ヨルダン全土に10カ所ある難民キャンプの一つ、スーフ・キャンプだ。  
1967年の第3次中東戦争で逃れてきたパレスチナ難民のためにできたスーフ・キャンプ。初めは荒野でのテント暮らしだったが、国連などの支援で水道や電気も使えるようになってからは、病院や学校などが建てら

れ、キャンプは町となった。とはいえ、貧困や高い失業率、人口増加に伴う衛生環境の悪化など、人々の暮らしは厳しい。学校も足りておらず、授業はやむを得ず午前と午後の二部制になっており、1人1日数時間程度しか受けられない。  
2009年6月よりここでサッカーを指導する、青年海外協

前転に取り組んでいる。脇で元気に声を掛けるのは、体育指導を担当するシニア海外ボランティアの土岐恵さんだ。  
850人以上の生徒が通うこの学校。ここでも教員や校舎に対して生徒の数が



(上) 体育の授業で生徒にマット運動を教える土岐さん  
(下) 柵を使って鉄棒の練習をする小学生たち。難民が通う学校では、体育の授業に適切な用具や場所が、まだまだ不足している

多く、授業は午前と午後で分けられている。さらに、音楽・図工といった生徒の心の発育に欠かせない情操教育の一部が行われていない。体育は女性教員が一人いるが、授業のための用具などが不足し、適切な指導も思うように実践できていない。そこで土岐さんがパートナーとして、生徒が楽しみながらできる運動、体育用具の有効活用、授業計画の作成など、さまざまなアドバイスを送っている。  
イスラム教の国、ヨルダンでは、女性が人目につく場所で運動する光景はほとんど見られない。難民居住地のような閉鎖的な場所であれば、なおさらだ。球技の経験がなく、ボールを投げ、捕ることができない子、縄跳びを一回も飛べない子も珍しく



元国体選手の角田さん(23歳・兵庫県)。その経験を生かし、難民キャンプの子どもたちにサッカーを教える